

「フェイクニュース」としてのキラキラネーム



What's in a name?

小林 康正 京都文教大学教授

吹奏楽部での高校生たちの成長と葛藤をヴィヴィットに描いた秀作『響け！ ユーフォニアム』にこんなシーンがある。入学して初のホームルーム。教師が川島緑輝の名前を読み上げようとして「りょくきょ」と言い淀む。川島が「サファリアです!!」と叫んで赤面する場面だ。この後、緑輝は主人公たちに「みどりと呼んで」と頼む。

自分の名前のキラキラネームっぷりが嫌で、別名で呼んでもらうというエピソードには、ネタ元がある。『響け！』の原作ができあがる少し前に「Yahoo! 知恵袋」に投稿された「私の名前は、キラキラネームです」がそれだ。一〇〇件を超すアンサーを得て、現在も閲覧ランキングの上位を占めている。親の理不尽さも加わって「キラキラネームは子どもに迷惑」という論調を勢いづけた。

現代の名前を代表するキラキラネームだが、どうも評判がよくない。特にネット上では散々な言われようだ。いわく就職に不利とか、救急救命での障害になるといった指摘だけでなく、親の人格否定はザラだ。けれども、どんな名前がキラキラネームなのかという判断としない。そもそもキラキラネームはどう定義されるのか。ウィキペディアは「一般常識から著しく外れているとされる珍しい名前に対する表現」とするが、名前についての「一般常識」がどんな内容で、「著しく」とほどの程度を指すのかが決まらない以上、その判定はやはり主観に任される。

もっともキラキラネームに否定的な意味合いが帯びている経緯は明らかである。こうした名前はすでに

二〇〇〇年ごろには目立っていた。ただそのころはDQNネームという別のことがあてられていた。ところが、誹謗的なニヤンスをもつDQNは、いわゆる「放送コード」の絡みから一般には使いづらかった。こうしたなか二〇〇九年の終わりごろにキラキラネームという上手い表現が発見されると、マスメディアはこれを使って一挙にこの現象を世間に伝えていく。キラキラはDQNという世間の悪意を覆い隠す綺麗事であった。

では、世間様はなぜそこまでキラキラネームを嫌うのだろうか。不謹慎ない方になるが、公共性があるとはいえ、あくまで「他人」の子どもの名前である。他者の倫理に対して倫理を問われるようなやり方で非難をおこなう不寛容やそうした感情の増幅は、どこから来るのか。最近の他の社会現象の傾向を見た場合でも、重要な視点だと思つ。

トランプ現象は、フェイクニュースに後押しされたといわれている。じつはキラキラネームの話題の多くがそれである。ネット関係者のあいだでは、キラキラネームは「鉄板ネタ」で、実在しない名前を並べてアクセスの誘因としたり、「私が光宙の父です（なんか文句あるか）」といった「釣り」が登場したりする。そして何より、このもつとも有名なキラキラネーム「光宙」も「ネットロア（ネット上の都市伝説）」なのである。「光宙と名前をつけるような親は教育し直さなければならぬ」という遊説がおこなわれたのが二〇二二年の総選挙。日本ではとくにトランプ現象が起きていたのではないか。